

初期のバドミントンアソシエーションルールの研究

— 1898年～1912年の変遷 —

A Study on the Official Edition of the Laws of Badminton of the Badminton Association

— An Analysis of Early Times Laws from 1898 to 1912 —

蘭 和真[※]

Kazuma Araragi[※]

Abstract

The purpose of the present study was to investigate changes of the laws of badminton edited by the Badminton Association from 1898 to 1912 and to consider the reason why the laws changed.

The shape of the court was changed from hourglass shape to rectangular shape in the edition of 1901-1902. It was supposed that badminton was played as a clear game after this edition. Because the court had a 15 foot waist at the net and the posts were continued up like Rugby posts to judge shots passing inside posts before this edition. So it was difficult to judge. Also it was difficult to set up a court and posts.

Some laws about service and receive were added in the edition of 1903-1904 and 1906-1907. It was supposed that badminton developed into the competitive game in these days.

A law about pace of shuttles was added in the edition of 1904-1905. It was supposed that badminton players technique developed quickly in these days.

The six or eight-handed games were deleted from the edition of 1907-1908. It was supposed that badminton became a dangerous game for forecourt players in particular. Shuttle might hit their face sometimes.

There was not big change after the edition of 1907-1908. It was suggested that the laws of badminton was almost settled down in that time.

Keywords : badminton, early times laws, official edition

I はじめに

バドミントン競技のルーツは、英国に古くから伝わるバトルドールアンドシャトルコックという羽根突き遊びと考えられている⁽⁶⁾。この羽根突き遊びが進化の中で色々なローカルルールが考えられていった⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹⁴⁾。しかしながら、ローカルルールでは違うルールを使っているクラブ間では対抗戦を行うことができないので、ルールを統一するために1893年に The Badminton Association が設立された⁽⁹⁾。そして、その協会で統一ルールが決められた。

本稿ではこの様な経過で The Badminton Association において統一されたルールのことをローカルルールに対してアソシエーションルールと呼ぶことにする。さて、協会設立直後のアソシエーションルールが記載されていたのではないかと考えられる書物について、大英図書館の蔵書目録にその記載

※日本経済大学経済学部健康スポーツ経営学科

があるが、第一次世界対戦の独の空爆によって焼失してしまった模様で現在のところ確認されていない⁶⁾。しかしながら、その後の1898年版を始めとして1911-1912年版までのオフィシャルエディションが確認された。

そこで、本研究は、1898年版のオフィシャルエディションをもとに、また、The Badminton Associationの機関誌であった、Lawn Tennis and Badminton（1899年12月号～1906年12月号）および、1907年12月号～、専門誌としてThe Badminton Associationバドミントン協会の機関誌となったバドミントンガゼットを参考に、当時のアソシエーションルールの変遷とその背景を明らかにすることを目的とした。

II 方 法

まずは、蘭が2004年に報告した1898年版のルールの概要⁽¹³⁾を改めて日本語に翻訳し提示した。そして、このルールを基準に、その後行われていったルールの改訂について経時的に概観した。特に、1901年4月の定期総会で決定されたコートとネットの形についての変更はその後のバドミントンの発展に大きな影響を与えたと思われる。また、その後のエディションでも少しずつルールの変更がなされていったが、これらの変更は同様にその後のバドミントンの進化に大きく影響を与えたものと考えられる。そこで、これらの変更についてその背景について考察をおこなった。

なお、当時のバドミントンシーズンは11月から始まり3月の全英選手権が終わるまでで、全英選手権が終了後に定期総会を開き次のシーズンに向けてのルールの変更を行ったため、ルールのエディションは1901-1902年版のような標記になっている。

他方、オフィシャルエディションは協会の役員名簿、加盟クラブ名簿、協会規約（Rules）、競技規則（Laws）などからなるものであるが、本研究ではその中の競技規則（Laws）についてのみ検討を行った。

III 結果と考察

(1) 1898年版の競技規則

コート

1. コートは次の図-Aの通りにレイアウトし、11/2インチ幅の白か黒のペンキかチョークで書かれた線で明確に示す。
2. ネットはなめらかな木綿の細紐を3/4インチ四方の網にしたものを長さ16フィート、幅2フィート6インチにし、中央部の高さ5フィート、ポスト部の高さ5フィート1インチに張る。
3. ポストは上述のとおりネットをまっすぐに保つことができるしっかりとしたもので、少なくともネットのレベルよりも6フィート高く突き出したものとする。図-Bの配置が推薦される。
4. シャトルは65～75グレインの垂さで、直径1インチのコルクに16～18枚の羽根をつけ、羽根の長さは21/2インチとし、上端が21/4インチの広がりを持ち、コルクの1インチ上部に糸をかがる。

上述の用具はF. H アイレス氏、111、アルダーゲートストリート、ロンドンでのみ手に入れることができる。

ゲーム

5. ゲームは各々のサイドが1人ずつあるいは2人ずつでプレーされる。
6. コートの選択 一最初のゲームにおけるサイドとファーストサービス権はトスによって決められる。それは次のように規定される。トスの勝者がファーストサービス権を選んだら、もう一方のプレーヤーはサイドを選択する。逆の場合も同じである。また、次のようにも規定されている。トスの勝者が望むならば最初の選択を相手プレーヤーに委ねてもよい。ただし、ゲームに勝ったサイドは次のゲームを開始する義務がある。そのときは勝者サイドのどちらのプレーヤーが次のゲームを開始してもよい。
7. ゲームは15得点から成る。13オールでは先に13に達したサイドがセティング5の選択権を持つ。14オールではセティング3である。
8. 3ゲームのうち2ゲームを先取した方が勝者である。3ゲーム目がプレーされる場合は、どちらかのスコアが8になったらサイドを交替する。

フォルト

9. サイドが、“イン”のプレーヤーがフォルトをした場合はハンドアウトとなる。サイドが“アウト”のプレーヤーがフォルトをした場合は、“イン”サイドに1点がカウントされる。
10. 次の場合はフォルトである。
 - (a) サービスがオーバーハンドである場合。(打たれる瞬間のシャトルがサーバーのウエストよりも高い場合、そのサービスはこのルールが意味するオーバーハンドであると考え)
 - (b) サービスが間違ったコートに落ちた場合(すなわちサーバーに対して対角線上の反対コートに落ちなかった場合)、あるいはショートサービスラインに達しない場合、あるいはロングサービスラインを越えた場合、あるいはバウンダリーラインの外側に落ちた場合。
 - (c) サーバーの両足が自分のコート内にない場合。

注) ライン上にある足はコートの外側にあるものとみなされる。

- (d) サービスあるいはプレーのいずれかにおいて、シャトルコックがゲームの境界線の外側に落ちた場合、あるいは両ポストあるいは両ポスト上のパーティカルラインの間を通過しなかった場合、あるいはネットの間やネットの下を通過した場合、あるいは屋根や側面の壁やプレーヤーのどれかの身体か衣服に触れた場合。

注) ライン上に落ちたシャトルコックはすべてそのラインが境界を示すコート内に落ちたものと考ええる。

- (e) シャトルコックがネットの打者サイドを越える前に打たれた場合。ただし、打者のラケットがシャトルを追ってネットを越えるのはよい。
- (f) シャトルがインプレーの間にプレーヤーがラケットや身体でネットやサポートに触れた場合。
- (g) 1人のプレーヤーがシャトルコックを2回打った場合、あるいは1人のプレーヤーとそのパートナーが2人でシャトルコックを打った場合。

- (h) プレーヤーが間違っただ順番で、あるいは間違っただコートからサーブし、フォルトがコールされた場合、あるいは次のサービスがリターンされる前に認められた場合。

プレー

11. ファーストハンドをどちらのサイドが持つかが決まったらそのサイドの右側コートのプレーヤーが反対サイドの右側コートのプレーヤーにサーブすることによってゲームを開始する。反対サイドの右側コートのプレーヤーがシャトルコックがグラウンドに触れる前にリターンしたら“イン”サイドの1人がそれを打ち返さなければならない。さらに“アウト”サイドはそれを打ち返さなければならない。それはフォルトを犯すかシャトルコックがグラウンドに触れるまで繰り返される。“イン”サイドがフォルトを犯した場合はサーバーのハンドはアウトとなる。そして、反対サイドの右コートのプレーヤーがサーバーとなる。しかし、サービスを受けなかったり、“アウトサイド”がフォルトを犯した場合は“イン”サイドが1点を得る。そして、“イン”サイドはコートを変えサーバーは左コートから反対のサイドの左コートにサーブする。また、自分のスコアに1点が増えられたときに限り、自分サイドのプレーヤーどうしがコートを交代する。各イニングのファーストサーブは右側コートから行う。サービスが取られた後はサービスラインを無視する。

一般ルール

12. サーブを受けることができる者は1人だけである。また、プレーヤーは2回連続してサーブを受けてはならない。
13. サーバーは相手が準備するまでサーブをしてはいけない。サービスリターンが試みられた場合、レシーバーは準備ができていたものと見なされる。サーブを打つときにサーバーが予備的に相手にフェイントをかけたりボークをした場合にはレシーバーにはサービスを受ける義務はない。
14. ゲームを開始するサイドの最初のイニングはワンハンドだけである。
15. サーバーは自分のコートのショートサービスラインとロングサービスラインの間のどこでも好きなところに立ってよい。
16. シャトルコックがサービスの際にネットかポストに触れた場合はレットである。しかし、インプレー中であればそのストロークは無効ではない。
17. どのような不測の事態についてもあるいは突発的な事故に対してもどちらかのプレーヤーから次のサービスの前に申し出があればアンパイヤーはレットとすることができる。その時にはプレーをやりなおす。
18. たとえそれが正しかろうが間違っただようがアンパイヤーの決定は最終のものである。

付 録

両サイド1人ずつのゲームではルール11、12と異なる次のことを除いて上述のルールを適用できる。異なることとは、得点が入る毎に両方のプレーヤーがコートを替えるということと、同じプレーヤーが続けてサーブを受けるということである。

バドミントンゲームは1つのサイドが3人ずつあるいは4人ずつでもプレーできる。この場合にはゲームは21得点で構成される。19オールでは先にその点に達したサイドがセティング5の選択権を持つ。20オールではセティング3である。

コートバックバウンダリーラインをロングサービスラインとしてもよい。また、バックプレーヤーはサービスがフロントプレーヤーを越えた後ならばそれを受けてもよい。

ゲームを開始するサイドの最初のイニングはツーストハンドのみである。その後はすべてのイニングでサイドの全員がハンドを持つ。また“イン”サイドの最初のプレーヤーはセカンドハンドがアウトになったらサードプレーヤーと場所を交替する。同様にセカンドプレーヤーはサードハンドがアウトになったらフォースプレーヤーと場所を交替する。

(2) 各エディションでの改訂の概要とその背景

1901年版-1902年版では、コート、ポスト、ネットの形状および寸法が大幅に変更された。特に、大きく変更されたのはコートの形状で図1の砂時計型から図2の長方形型に変わった。ポストの位置についてはサイドバウンダリーライン上でも2フィートを越えない範囲であればコートの外側でもよいことになった。したがって、ネットの長さが従来は16フィートであったが20~24フィートとなった。以上の改訂はその後のバドミントンの進化に大きな影響を与えたものと推察される。これまでのルー

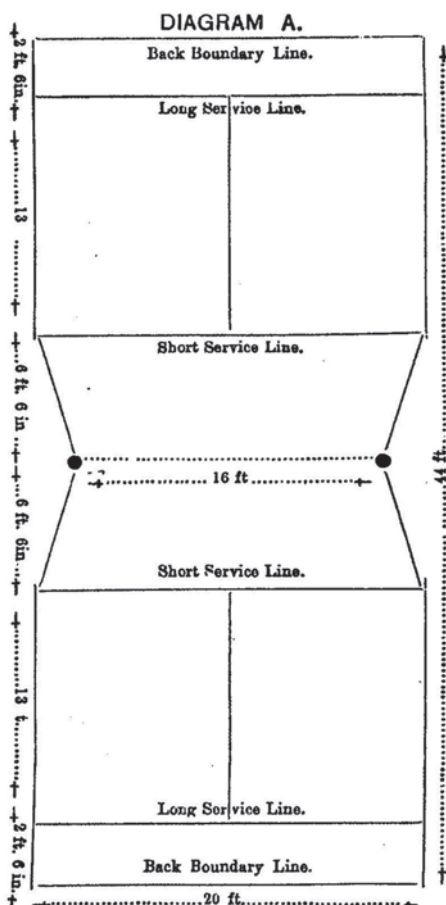
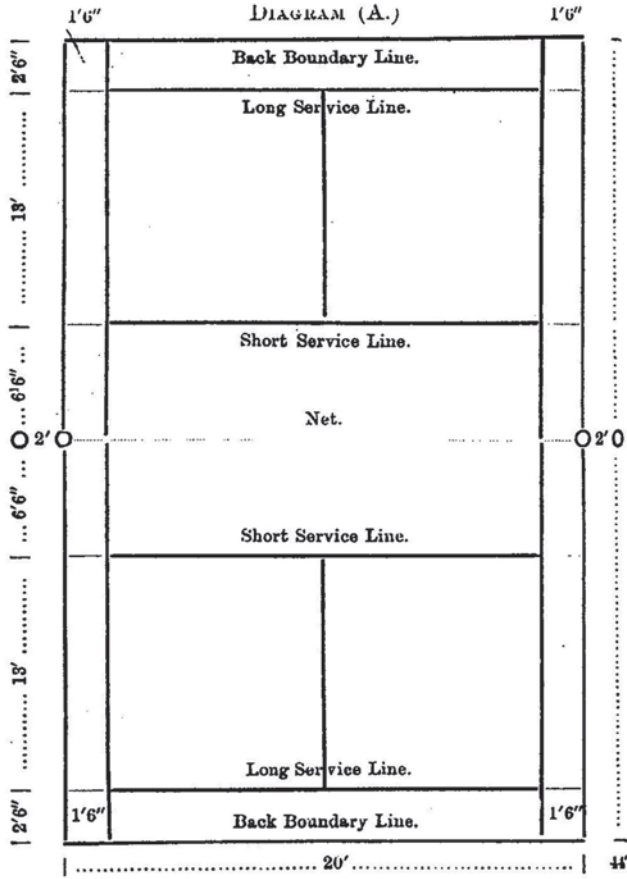


図 1



NOTES.—The posts may be placed on the side boundary lines, or at any distance not exceeding 2ft. outside the said lines.
 The inner side lines show the side boundaries for the Singles' Court. In the Singles' Court the Long Service Lines do not apply, the Back Boundary Lines becoming the Long Service Lines, and the Medium Lines being produced to join the Back Boundary Lines.

図2

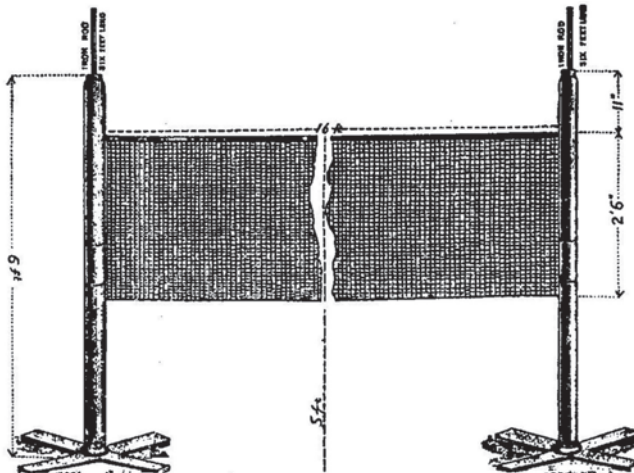


図3

ルでのコートは砂時計型、すなわち、ネット上でコートがくびれるという極めて特殊な形であったためその判定が極めて難しくもめ事が多かったとの記録がある⁽¹³⁾。すなわち、このルールではシャトルがネット上を通過しなければフォルトと規定されていたのであるがその判定は難しく、そのため、ポスト上に、さらに、6フィートの鉄の棒を設置し、あたかもラグビーのゴールのようにして、シャトルの通過を判定していたが、これが判定に困難を生じさせたことは容易に想像ができる(図3)。また、このようなコートでは設置するのにも手間やお金がかかる。したがって、このままのルールでは手軽にできるスポーツとはなり得なかったのではないかと推察される。さらに、この改訂では、シングルス用のサイドバウンダリーラインが新たに設けられた。このことは、この時期、バドミントンが競技化していったことを示すものではなかろうか。それまでは、レクリエーション的に多人数で行っていたものがプレーヤーの数を減らしたゲームに焦点を当てていくということは、やはり、競技化が進んだことを表すものと推察される。これを証明するように、さらに加えて、シングルスでは従来までのロングサービスラインが廃止され、バックバウンダリーラインをロングサービスラインとすることとなった。これもかなり踏み込んだ提案が可決されたと言って良いであろう。このことも、シングルスを楽しむためのオプションとして変更されたものと考えられる。他方、ポストの高さが5フィート1インチになり、サービス、プレーのいずれのときにおいても、シャトルがポストの外側を通過してもフォルトではなくなったことから判定もしやすく、また、ラリーを続けやすくなったことから、技術的にもより楽しみやすいスポーツに変化していったものと推測される。

1903年版-1904年版では、サービスを受けるプレーヤーに対してサービスが打たれるまで自分のサービスコート(当時は単にコートと呼んでいた)の中に両足をつけて立っていなければならないという規定が設けられた。このことも、この時期にバドミントンが競技化していったことを示すものだと考えられる。レクリエーション的にやっていた時代にはラリーを続けることが大切であったが、ラリーに勝つためにはより攻撃的な動きが必要となる。したがって、相手がサーブを打つ前に動いて決めようとする戦法が考えられ、しかしながら、そのことによってラリーが続けにくくなり興味が半減することから、このルールが取り入れられたものと推察される。これに呼応する形、あるいは、補完する形で、サービスに関するルールの中で従来まではサービスを受けた後はサービスラインを無視してよいと規定されていたが、サービスが打たれた後はサービスラインを無視してよいという規定に変更された。これも、サーブに関するルールを明確にすることによって、競技としての興味を保とうとしたためのものと考えられる。

1904年版-1905年版では、シャトルの重量、コルクの直径、羽根の枚数、羽根の長さや広がり、糸のかかり方に関する規定が変更され、シャトルのペースに関する規定が新たに設けられた。このことから、この時期にはかなり高度な競技にバドミントンが進化していたことが想像される。シャトルの構造が競技に影響を与えるようになってきた。すなわち、プレーヤーの技術が上がってきたため、用具の規定をしっかりとし、対戦者間で不平等が生じないようにこのような規定を設ける必要があったと想像される。また、ハンディキャップゲームにおける3ゲーム目途中でのチェンジエンド(当時はチェンジサイドと呼んでいた)に関する規定が新たに設けられた。

1906年版-1907年版では、シングルス、ダブルス専用コートが図示されるようになった。従い、

ネットの長さの規定が17～24フィートに変更された。これも、競技が高度化していったため、よりわかりやすいルールの提示が必要になったためであると考えられる。また、サービスの順番あるいはコート間違えた場合、従来はフォルトであったが、そのときに得点をした場合はそのプレーをレットにするということに変更された。これも、試合をする中で色々なトラブルが起き、平等化を図るためのものと推察される。さらに、間違ったコートに立ったプレーヤーがサーブをレシーブし、そのラリーに勝った場合はそのプレーをレットにするという規定が新たに設けられた。これも、バドミントン競技が勝敗にこだわるスポーツに変化していったため、平等化の流れからこのようなルールが追加されたものと推察される。他方、州の代表選手としてプレーするための資格を規定する章が新たに設けられた。このようなルールが必要になるということは、多くの者が勝負にこだわり始めたことを示唆していると考えられる。参加資格によって勝ち負けの行方が左右されることになることから明確なルールが必要になったことを意味すると考えられる。いよいよ、バドミントンが競技スポーツとして産声を上げたことを示すルールの追加ではないかと推察された。

1907年版-1908年版では、ダブルゲームの得点が従来は15点と規定されていたが、15点あるいは21点に変更された。従来までは1ゲーム目が終了したときと3ゲーム目の途中でチェンジエンド（この年からチェンジサイドではなくチェンジエンドと呼ばれるようになった）するように規定されていたが、1ゲーム目が終了したときと2ゲーム目が終了したときと3ゲーム目の途中でチェンジエンドするように変更された。現在のサービスコートという意味で使われていたコートという言葉に変わってハーフコートという言葉が現在のサービスコートの意味で使われるようになった。これらのことも、ゲームが高度化するにしたがって色々な用語が必要となったためルールブックに採用されたと考えられる。また、故意に相手を妨害した場合はフォルトであるという規定が新たに設けられた。このようなことから、この時期には様々な戦術が新たに生み出されていったことが推測される。さらに、レディースシングルマッチの1ゲームの得点が11点から成り、9オールではセティング3、10オールではセティング2という規定が新たに設けられた、ことから、この頃には女性プレーヤーが本格的に競技化していったことが推測された。他方、シックスあるいはエイトハンドットゲームに関する章が削除された。このことは、競技が高度化したため、前衛に常駐しなければならない3対3や4対4のゲームが危険となったためこれらの種目が削られた可能性がある。事実、バドミントンガゼット誌上で寄稿された当時の回顧録⁽¹⁰⁾によると、女性がネット際で大声で叫ぶことがあったという。それを、「ヒットアンドスクリーム」と呼んだそうであるが、高速のシャトルが彼女らに当たりそうになったときにこのようなことがあったということである。1907年版-1908年版の改訂でも、ネット際で自分の顔を守るためやりターンをインターセプトしようとしてラケットを上げてそれが故意に相手の邪魔をしようとするものでなければフォルトではないという解説が新たに設けられたことは上述を裏付けるルールブックへの記載と考えられる。

1908年版-1909年版では、11点のゲームでは3ゲーム目リードしでいる方のスコアが6になったらエンドを替えるという規定が新たに加えられ、1909年版-1910年版では、シャトルの糸かがりに関する規定が変更され、1911年版-1912年版ではシャトルがネットを越えた後にネットに引っ掛かるか乗った場合はレットであるという規定が新たに設けられた。しかしながら、あまり大きな改訂とは考えられないことから、この時期にはほぼバドミントンのルールが確定されたものと考えられる。

IV まとめ

本研究の目的は、1898年版のオフィシャルエディションをもとに、また、The Badminton Associationの機関誌であった、Lawn Tennis and Badminton（1899年12月号～1906年12月号）および、1907年12月号～、専門誌としてThe Badminton Associationバドミントン協会の機関誌となったバドミントンガゼットを参考に、当時のアソシエーションルールの変遷とその背景を明らかにすることであった。そのために、まずは、1898年版のオフィシャルエディションの日本語訳を示した。そして、1911年版-1912年版までの年次変化を元にその背景を考察した。主な成果は以下の通りであった。

1901年版-1902年版では、コート、ポスト、ネットの形状および寸法が大幅に変更された。特に、大きな変化は、コートの形状が砂時計型から長方形型に変わったことであった。このことから、コートの設置に手間やお金がかからなくなり、手軽にできるスポーツとなったと考えられた。さらに、シングルス用のサイドバウンダリーラインが新たに設けられた。このことは、この時期、バドミントンが競技化していったことを示すものと考えられた。それまでは、レクリエーション的に多人数で行っていたものがプレイヤーの数を減らしたゲームに焦点を当てていくということはやはり競技化が進んだことを表すものと推察された。1903年版-1904年版では、サービスを受けるプレイヤーに対してサービスが打たれるまで自分のサービスコートの中に両足をつけて立っていなければならないという規定が設けられた。このことも、この時期にバドミントンが競技化していったことを示すものだと考えられる。レクリエーション的にやっていた時代にはラリーを続けることが大切であったが、ラリーに勝つためにはより攻撃的な動きが必要となる。したがって、相手がサーブを打つ前に動いて決めようとする戦法が考えられ、しかしながら、そのことによってラリーが続けにくくなり興味が半減することから、このルールが取り入れられたものと推察される。1904年版-1905年版では、シャトルの重量、コルクの直径、羽根の枚数、羽根の長さおよび広がり、糸のかがり方に関する規定が変更され、シャトルのペースに関する規定が新たに設けられた。このことから、この時期にはかなり高度な競技にバドミントンが進化した事が想像された。プレイヤーの技術が上がってきたため、用具の規定をしっかりとし、対戦者間で不平等が生じないようにこのような規定を設ける必要があったと想像される。1906年版-1907年版では、サービスの順番あるいはコートを間違えた場合、従来はフォルトであったが、そのときに得点した場合はそのプレーをレットにすることに変更された。これも、競技をしていく中で行く中で色々なトラブルが起き、平等化を図るためのものと推察される。他方、州の代表選手としてプレーするための資格を規定する章が新たに設けられた。いよいよ、バドミントンが競技スポーツとして産声を上げたことを示すルールの追加ではないかと推察された。

1907年版-1908年版では、故意に相手を妨害した場合はフォルトであるという規定が新たに設けられた。このようなことから、様々な戦術が新たに生み出されていったことが推測された。さらに、レディースシングルマッチの1ゲームの得点が11点から成り、9オールではセティング3、10オールではセティング2という規定が新たに設けられた、ことから、この頃には女性プレイヤーが本格的に競技化していったことが推測された。他方、シックスあるいはエイトバンデットゲームに関する章が削除された。このことは、競技が高度化したため、前衛に常駐しなければならない3対3や4対4の

ゲームが危険となったためこれらの種目が削られた可能性がある。これに併せて、ネット際で自分の顔を守名ためやりターンをインターセプトしようとしてラケットを上げてそれが故意に相手の邪魔をしようとするものでなければフォルトではないという解説が新たに設けられた、ことは、上述を裏付けるルールブックへの記載と考えられるのではなかろうか。

1908年版-1909年版以降では、あまり大きな改訂が見られなかった。この時期にはほぼバドミントンのルールが確定されたものと考えられた。

引用文献

- (1) 蘭和真 (2005). 「初期のオフィシャルバドミントンルールの研究-1898年~1912年のルールの変化-」、東海女子大学紀要、第24号、15-31頁。
- (2) 蘭和真 (2009). 「北京オリンピックバドミントン競技における女子シングルスゲーム分析-ゲーム時間およびラリー当たりの時間とストローク数に着目して-」、東海学院大学紀要、第3号、11~16頁。
- (3) 蘭和真 (2012). 「ロンドンオリンピック大会におけるバドミントン競技のゲーム分析」、東海学院大学紀要、第6号、17-23。
- (4) 蘭和真 (2015). 「バドミントンの試合時間に関する研究-ラリーポイント制移行後の動向-」、東海学院大学年報、第1号、1-7。
- (5) 蘭和真 (2014). 「サービス権の有無がバドミントンの得点に与える影響-ロンドンオリンピックのゲーム分析による-」、東海学院大学紀要、第8号、1-8。
- (6) Bernard Adams (1980). The Badminton Story, BBC, p.17.
- (7) Buchanan J (1876). Rules for New Game of Lawn Tennis and Badminton, pp.18-23.
- (8) Cavendish (1876). The Game of Lawn Tennis and Badminton, Thos. De. La Rue, pp.25-29.
- (9) Davis P (1987). The Encyclopaedia of Badminton, Robert Hale Limited, p.12.
- (10) John E (1946-47). Recollections of old-time Badminton, The Badminton Gazette, Dec.-Jan., p.31.
- (11) Jones H (1875). Badminton, The Encyclopaedia Britannica, 9th ed, Vol. 3, p.228.
- (12) Kieth A (1880). The Sportsman's Yearbook, Cassel, Petter, Galpin & Co., p.193.
- (13) The Lawn Tennis Association (1901). The Badminton Association, Lawn Tennis, Nov. 6.
- (14) Marshall J (1878). Lawn Tennis and Badminton, Jefferies & CO., pp.56-59.